エッセイ

「振り返りこれからを思うこと」

マネジメントオフィス たき　代表　多木（たき）　有一（ゆういち）

住　　所：加古川市別府町本町2丁目5
ＴＥＬ：079-437-6223
営業内容：特定社会保険労務士

それぞれに平坦な道はなかった。

東京での大学生活に父は、原理原則を学ぶこと、一生付き合う友達を作ることを言った。

いきなり、学園紛争があり教室が閉鎖された。所属していた経営管理研究会では、存続の意義を考え解体（廃部）するのか総括と称して一人一人問いつめていった。結果、伝統であるマルクス経済学から、近代経営学に変えた。しかし、卒業後もとのマルクス経済学に戻り廃部となった。

父は起業家だったが、私は損害保険会社でサラリーマンの生活を送った。独身貴族を謳歌しすぎ、体を壊し6か月間休職をした。父が亡くなったあと、転勤族となり、静岡で結婚、家族とともに北海道、茨城そして単身赴任で福井となり退職した。

阪神大震災のときは、茨城にいた。応援部隊で神戸の街をローラー作戦で直接契約先に行き地震保険の請求手続きをして回った。その時に始めてこの仕事をしていてよかったと実感した。それまでは、営業活動でノルマに押しつぶされていた。

阪神大震災をきっかけに実家に帰ることにした。母が老いてきたこと、子供の教育のことなどあったが、大きな動機となったのが、早期退職優遇制度だった。それを選択して、48歳で25年間勤めた会社を退職した。ゆっくりしたかったが、子どもたちがこれから受験の時を迎え無職ではいけないと考え資格を取ることにした。資格をとったあと各種団体に入会することができた。何か専門分野をつくらないと考えていたときある人から個人から法人に組織変更するための手続きを依頼された。それが会社のルール作りの始まりであった。ある人とは、父を知っていた縁が繋がった。当初は、リスク防衛の観点に立っていた。それなりに組み立てると部厚ものになっていた。完成したものの周知されず、残念な思いをしていた。メンタルヘルスが増えてきたころからよりわかりやすく実践的になるよう変わってきた。

新型コロナウイルスの3年間、生きることの大切さと、人々に助けられていることを、しみじみ感じた。プロジェクトX（挑戦者たち）の本の見出しに『熱い情熱を抱き、使命感に燃え、プロとしての矜持を胸に、人々はどのように、直面する障害を乗り越え、マニュアルのない状況を切り拓いていったのか』を全巻読み直しながら、泣き、かみしめて生き抜くことと、仕事をすることの大切さを思い知った。

今年から息子と仕事をすることになった。息子は、楽しそうに仕事の話をしている父の姿を見て考えたとのこと。息子の銀行員、コンサルタント等の経験を生かしていきたい。次世代へと変化するなか、対応を考え直さなければ通用しなくなってきている。お互いにお客様の想いを形に、共学・共創・共栄でいきたい。

父の言葉の原理原則は今になって分かってきたような気がする。がまだまだ学ぶ課題がでてきた。一生付き合う友達作りは続いている。最後に父に感謝している。ありがとう。